



【サンプル】愛が重い王族二人に愛される

野菜箱

春の暖かな風が吹き始める季節、その日は大変天気が良かったため、お城の中庭には色とりどりの花々が咲き誇り、誰もが幸せな時間を過ごす中、私たちは産まれた

「「おぎゃー！ おぎゃー！」」

「ああ、なんて可愛い赤ちゃん」

「頑張ったな！ 王妃！」

元気な産声を上げた私達は双子の男女だった、両者とも両親から譲り受けた美しい黒い髪と白い肌を持ち、顔つきも瓜二つであった、両親は私たちの誕生に大層喜び、私は母に抱かれ、兄は父の腕の中にいたしかし、この二人の誕生を喜ばない者がいた

「双子か………なんて不吉な…我国、イベリス王国に不幸を招くぞ…」

「早急に女の方を処理したいが、古くからの決まりだ、5歳までは手出し出来ん」

皇太后と一部家臣との者たちは、私の存在を良しとはしなかったのだ、理由は様々だが一番の理由は、双子だからだ、5歳を迎える時に始末しなければ災いをもたらすと
言う、言い伝えがイベリス王国に昔からあったからだ、だが両親はそんな言い伝えを

信じず私たちを平等に愛してくれ、どうか私を殺さないように働きかけてくれた。

結果だけでいうと私は生かされた、ただただ生かされてるわけではない、私の命は兄であるイキシアによって守られたのだった、兄の体は弱くベッドの上で過ごす事が多かった、そのため顔が似ている私が兄に代わって公務を行うことで、私が兄の影武者をするこで生きる事を許されたのだった。

イベリス王国は小国で農業は盛んで、山と森に囲まれているが鉱物資源が少なく木材加工が盛んだったが地形的に複数の国との貿易や交流がしづらいため技術の発展はあまり進んでおらず、軍事力や経済力では隣国の大国ヴァレンワート帝国に大きく劣っていた、なのでヴァレンワート帝国と本気で戦争になれば勝ち目はなく滅亡するしかない状況であった、その為後継や内政事情で付け入る隙を与えるわけにはいかななく、私の存在を知る者はごく一部の家族と家臣と召使たちのみであった。

私の勉強する内容は兄と一緒に内容を兄と同じように学び、剣術や魔法などに関しても兄と同じレベルで習得した、学校では兄が体調が悪い日は私が出席し、兄の代わりに

授業を受けたりもした、もちろんその中では、兄のように振る舞うように心がけた、私自身の存在がバレないように、正直この生活は幼い私には辛かった、でも私のせいで両親にも国民にも迷惑をかけたくなかった、だから私は必死に耐えた、だがそんな生活の中でもいいことはある、それは家族の存在だ、両親は私を愛してくれ

「リリー、お前がどうか普通に暮らせるよう尽力しよう」

「ええ、それに私達の子供なんだから、必ず守るわよ」

両親はいつもそう言ってくれ、双子の兄イキシアも私の事をとて大切にしてくれ、時には優しく頭を撫でてくれたり、一緒に遊んでくれたり、怖い夢を見た時は私が寝付くまで一緒に寝てくれたりもした、そんな兄が好きだった、大好きだった、そしていつしか私は兄に恋をしていたのだ、決して叶わない想いだと思っていた、だけである日を境に状況が変わった。

私たちが14歳の頃季節は秋に差し掛かり紅葉が始まる頃、その日は久々に家族4人が揃って食事をし久々の家族団欒を楽しんだ後両親が私たちの部屋から出て行った後、兄が突然キスをしてきたのだ

「んっ!? ふう……ちゅぱ……ぷはあ……お……お兄様どうしたの……いきなりこんなこと……」

「ごめん……我慢できなくて」

兄にキスされた私は顔を真っ赤にして恥ずかしさを隠すように俯いていた、すると今度は兄から抱きしめられ、耳元で囁かれた

「リリー好きだよ」

「お……お兄さま……ダメです……兄妹なのに……」

「僕は妹としてじゃなく1人の女性として君を見てるんだ」

兄の言葉にさらに顔が熱くなるのを感じた私だつて兄を男性として好きだった、けど私たちは兄妹でこの気持ちを伝えてはいけないと思っていた、私は兄に抱きしめられて嬉しかったけど、それと同時に悲しくもあつた

「お兄さま……ありがとうございます……でも私は……」

「わかつてる……僕らは兄妹だ……結ばれちゃいけないのも分かかつてる……でも、それでも好きなんだよ……」

「お兄様……」

私は涙を流した、実の兄に告白され胸が張り裂けそうなほど苦しくなった、だがそれ以上に嬉しかった、兄も私と同じ気持ちでいてくれて

「ねえリリー……僕の事嫌い？」

「ううん好きです。世界でたった一人の私の大切なお兄様……」

「僕もだよ、リリーの事が大切だ何より愛してる……」

私たちはどちらともなく唇を重ねた、お互いの舌と唾液を絡め合いながら何度も求め合った、生まれて初めての感覚に頭がクラクラしながら幸福感に包まれていた

「んん……はむ……んんん」

長い口づけを終え、銀色の糸を引きながら離れると、兄の顔はとても艶つぽく見えた、私は自分の鼓動が早くなるのを感じ無意識のうちに兄に抱きついていて、それに応えるかのように兄も私を強く抱きしめ返してくれ、その日眠りについた。

それから私たちの関係が変わっていった、両親や家臣たちにバレないように隠れて愛し合うようになったのだ、両親の目を盗んでは二人でキスをしたり、誰もいないところ

ろで手を繋いだりと幸せな時間を過ごしたが、それ以上先には行かなかった。

私たちの部屋は普通の部屋と違っており、少し特殊で本来兄だけの部屋だったのだが、私が影武者になった時から私と兄の共同部屋になっている、ぱっと見一人部屋に見える作りだが、本棚の裏に隠し部屋があつて一応そこが私の部屋になっている窓は無くほぼ寝るのと身を隠すための部屋になっている、そして兄の体調が悪くなりやすいという事で専用のバスルームが併設されており、そのため私たちの事を知らない使用人に気づかれにくい仕組みになっており、二人の時間を作ろうと思えばいくらでも作れるようになっていいる。

そんな関係が2年続き17歳の春、この頃になると兄の体の調子が悪くなる事が少なくなっていたが、その日は兄が徐々に体調を崩していたため、私が代わりに公務を行うことになった。

今回の公務はとても重要でヴァレンワート帝国の皇帝との会談で目的は同盟を結ぶことにあつた、ヴァレンワート帝国は魔法と金融に優れた国であり、軍事力も高く大国で、我が国とは比べ物にならないくらい技術力を持っている、そのため相手の機嫌

を損ねるわけにはいかない、その為今回の会談では異例の私と私の両親とどのつまり国王と王妃と次期国王が訪問することとなった。

私はいつものように、兄のイキシアに変装をしてお城の馬車に乗り込んだ、イキシアの格好をしているときは自然と兄の振る舞いが身についており、意識することなく兄のふりが出来るようになっていた、今までこの兄の身代わりを見抜いた人間は誰一人としていなかった。

馬車に乗り込み、両親と私を乗せた豪華な装飾が施された四頭の馬が引く二台の大きな馬車は、ヴァレンワート帝国に向けて出発した。

道中は順調に進み大きなトラブルが起こることもなく、予定通り出発から数時間後にヴァレンワート帝国の首都に到着した。

「ここがヴァレンワート帝国の帝都か、すごいなあ…」

私は初めて見る大都市に圧倒されていた、大きい建物がいくつもあり、まるでお祭りのような賑やかな街並みで、街ゆく人々は皆笑顔で溢れている、そんな光景に私は心を躍らせていた一方両親は慣れたもので特に緊張している様子はない、むしろ楽しみ

にしているようだしばらく進むと街の中央にある城に到着し、そのまま城内に入っていく、城門の衛兵たちは私達一行を見るとすぐに敬礼をし、出迎えてくれた

「イベリス王国国王陛下ならびに王妃殿下並びに王子殿下ご到着!!」

広いエントランスホールに声が響き渡ると、一斉に綺麗に整列したメイドたちが頭を下げ、私達は用意された豪華な絨毯の敷かれた階段を上り、会談用の部屋に通されたそこにはマントを着た若き青年が立っていた

「遠路はるばるよくぞ参られました、イベリス王国の皆さん歓迎します。」

「こちらこそ、お会いできて光栄です、ヴァレンワート帝国皇帝、ラルフ・レーゲル・ヴァレンワート殿」

ラルフは20歳と若くして皇帝の座に就き、国民からも絶大な人気を誇るカリスマ性を持った人物で、人を見る目があり、不穏な動きがあると即座に対応でき、国の発展に尽力してきた名君だと言われている、見た目も爽やかで金髪碧眼で端正で整った顔立ちをしており、様々な方面からお見合いの話尽きならしい。

そんな彼と父と母は握手を交わし、私とも握手をしたのだが

「……」

「ラルフ皇帝どうなさいましたか？」

「いえ、失礼しました、では会談を始めましょう」

互いに席に着き、まずは互いの国の現状の報告から始まり、今後の両国の貿易や外交についての話や、これからの同盟関係についてなどを話し合った。

「では改めて、我らヴァレンワート帝国は、今年の水不足が発生してしまいまして、今年はまだどうにかりますが、来年には食糧危機になるのは、目に見えている状況です」

「ええ、そして我国イベリスは魔法技術が他国よりだいぶ遅れをとっており、このままでは国力の低下は避けられず技術提供していただける国を探している状況」

「そして我がヴァレンワート帝国は魔法技術が発展しており、貴国イベリスは農業が盛んで今年は特に豊作のこと利害の一致という事でよろしいでしょうか」

「ええ、そうですね、お互いの足りない部分を補えるような同盟を結びたいと思います」

「はい、異論ありません明日細かい日取りや提供技術内容について改めて会談しましょう」

こうして私達の国イベリスとヴァレンワート帝国の二国間で正式に同盟国となった、その日の夜は祝宴が開かれ私はイキシアの姿のまま参加していた、もちろん父や母も参加している。

祝宴は豪華絢爛で美味しい料理が並び、楽団による演奏が披露されている、私は普段食べれないようなものばかりでどれから食べようかと目が輝いていた、だがヴァレンワート帝国の貴族の娘さん方に囲まれてしまい、中々抜け出せずにいた、自分で言うのもなんだが私達双子の容姿は悪くはないそして一国の王族、そのため貴族のご令嬢たちからモテてしまうのだ。

（うーん困ったなあ……下手な事言えないな、お兄様に迷惑かけたくないしどうしよう……）

するとそこにコツツコツツと靴音が聞こえたと思うと、後ろから声がある
「こんばんはお嬢様達、申し訳ないがイキシア殿をお借りしたいのですが」

「ええ、もちろんですわ、皇帝陛下どうぞごゆっくり」

「ありがとうございます。イキシア殿こちらへ」

私は助け舟を出してくれたラルフ皇帝に感謝しつつついていった。

「助かりました。ありがとうございます皇帝陛下」

「いや気にしないでください、私も貴女とお話したかったので」

「僕ですか？ 何か粗相でも……」

「いやいや、そういうのではないですよ、ただ個人的に興味があったものでして、その、お聞きしてもよろしいか？」

彼は私の顔をじつと見つめながら聞いてきた、私は何だろうと思いつつも彼の顔があまりにも真剣だったため、無下に断ることも出来ず私は首を縦に振り了承しバルコニーへと案内される夜の風が心地良く頬を撫でるふと空を見上げると満天の星が広がっていた、イベリスとは違う星に私は感動を覚えていたそんな私を見てか彼が口を開く、
「貴殿のお噂はか伺っていますよ。何でも成績優秀で芸術にも造詣が深く、お若いながらも民からの信望厚いと」

ラルフ皇帝は手に持っていたワインを嗜みつつ私の方を向く、ワインを飲んでる姿ですら絵になるなと思いつつ、その目は先ほどまでの優しげな目ではなく、どこか何もかも見透かしつつ冷たさを感じる目をしていた。

「いえ、そんなことは……若くして帝国をまとめるラルフ皇帝に比べれば、まだまだ未熟者です」

「そんなことは無いでしょう、私もまだ若輩者でしてね。だからぜひ、同年代のあなたと仲良くなりたいと思っただけですよ。」

「それは嬉しいです、私もラルフ皇帝と仲良くなれればと思っただけです」

ここで仲良くなっておけば後々次期王位に着く兄のためイベリス国のためになる、私はそう思い好印象を与えるように笑顔で答え、世間話に花を咲かせるそれぞれの国の違い、特産物、最近の出来事、自分たちの趣味の話、次第に意気投合し、時間が許す限り話し意気投合をした。

「気が合うな我々二人は、こんなに話が合うなんて思っただけじゃなかった。また近いうちに二人で会おうじゃないか、今度は二人で乗馬なんてどうだろうか？」

「はい喜んで、是非お願いします。楽しみにしておきます。」
こうして祝宴が終わり、私はラルフ皇帝と親交を深めることができた、外交としては満点なのではないだろうか？ こうして私達は3日間滞在し同盟を結ぶことができ、無事にヴァレンワート帝国から帰国した。

帰りの馬車の中で両親に褒められたが、私にはそれよりももっと気になっていることがあった。

「あの皇帝の目、あれは一体なんだっただろう……」

私はその事がずっと気になっていた、私の心の奥底まで覗かれているような感覚に陥り、少し怖くなつたが、きつと気のせいだと思い、忘れることにした。

それから数日が経過し、この日は私たちの誕生日で我国では、18歳が成人のため今回の誕生日は国をあげてお祝いをするに他国からも客人を招きそれはもう盛大に、だが祝われるのはイキシアだけ、私は部屋から出ることはできないため、例年通り自分の部屋で過ごしていると勢いよく扉をノックする音が聞こえる。

ドンツドンツドンツ!! 扉を開けると

「大変ですりりー様!!」

そこには血相を変えた、数少ない私たちの事を知っている執事が立っていた。

「どうしたんですか!？」

「ラルフ皇帝が、りりー様とイキシア様が別人であることに気づかれてしまいました!」

「えっ……」

私は頭が真っ白になった。

「なにかの間違いでは……」

「それが本当なのです、私に『本日はご本人は不在ですか？ 祝われているのは、以前あつたイキシア殿と別人のようですが』と聞かれたので否定したのですが、信じてもらえず問い詰められて……」

「それでどうなったの？」

「はい、こちらが本物で外交に出ていた物が影武者ですとは言えず、動揺し思わず咄嗟に『ご本人様は今現在体調を崩されて、お休みになっておられます。』とごまかしはしたのですがそしたらラルフ皇帝は『せっかくの誕生日に可哀想に、謝罪と贈

り物を渡したいのでイキシア殿の部屋を教えてくださいませんか?』と言われてしまつて」

私は頭を抱えた、今までバレたことはなかったし怪しまれた事もなかったため大丈夫だと思っていたのだが……まさかバレるとは思っても見なかった、しかも相手はこれから仲良くなつていこうとしている国の皇帝だ、断れるはずもなく急いで準備をし、イキシアの格好をしてラルフ皇帝に会うこととなつた。

パジャマに着替えてベッドに入り、体調が悪そうな化粧を施し髪を今起きましたつて感じにセットする

数分待つた後コンツコンツ部屋のドアが叩かれる、私はゆっくりと深呼吸をし気持ちを落ち着かせてから返事をする。

「はい」

「失礼します。イキシア王子、ラルフ皇帝がお見えになりました。」

「わかりました、通してください」

「はっ」

ガチャリ部屋に入ってきたラルフ皇帝は開口一番私の顔を見ながらニコツとして、「お加減はどうですか？ この度は体調不良にもかかわらず無理させてしまい申し訳ありません」

と謝ってきたが、私は慌てて、

「いえいえ、お気になさらず、わざわざお越しいただきありがとうございます。そしてここのような格好で申し訳ございません。」

と返すと、ラルフ皇帝はまたあの目をした、何もかもを見通すような目で私を見つめる私はそれに負けじと必死に平静を装うが、内心では心臓がバクバクしていた。

「イキシア殿、今日はプレゼントを持ってきたのですよせっかくなら本人にお渡ししたくて、ささやかな物ですが受け取っていただけますか？」

「はい、もちろんです。ありがたく頂戴いたします」

ラルフ皇帝は綺麗に包装された箱を私に差し出し受け取る

「開けてもよろしいでしょうか？」

「ええもちろんです」

私は丁寧に包み紙を取り、中身を確認すると以前の祝宴で話題に上がったラルフ皇帝のおすすめ小説であった。

「これ以前話されていた本ですね、とても読みたかったので嬉しいです。」
「喜んでいただけよかったです。」

その後は当たり障りのない会話をしながら談笑し、1時間程でお開きとなった。「では長居してしまいすみませんでした。私はこれで失礼させていただきます。また予定を合わせて乗馬でもしましょう」

「ええ、楽しみにしております。本日は誠にありがとうございます。」
私は精一杯微笑みラルフ皇帝が出ていくのを見送る、そして足音が完全に聞こえなくなるまで肩を落とす

「はあ…なんとか乗り切ったけど…」
これはやばい状況になったなと思いつつも、今日は誕生祭という事で問題は翌日に回された。

次の日は家族と私たちの事を知る家臣達とで会議がおこなわれた、議題はもちろん昨

日の件である。

今まで私達の入替わりは上手くいって来たため、みんな困惑しているようだった。今回ことが大きくなっている理由として相手が明らかに我国より力を持っている他国の王というのが問題で、挙げ句の果てに大切な外交の時に偽物を使って対応を行っていた事実、さらに偽物の方を本物だと誤認させてしまったことにより問題に拍車がかかっている。

「申し訳ございません。」

執事が深々と謝るが、皆「その状況なら、そう言う他ない」と同情気味であった。結論から言う『以後、ヴァレンワート帝国相手の公務はリリーが行う事とする』となった。

兄のイキシアはその決定に異議を唱えようとしたが、

「イキシア、お前の言いたい事はわかるが、これ以上事を荒立てるわけにはいかないんだ、わかってくれ。」

と父に言われてしまい、渋々了承したがやはり納得できないのかずつと不満げな顔を

していた。

会議が終わり、私たちの部屋に戻っても兄の不機嫌は治っていなかった、こんなにも不機嫌になる兄は、初めてで私はどうすればいい分からず。

「兄様申し訳ございません、きつと外交時に私の不手際があつたためにこうなつてしまったのでしよう、兄様にご迷惑をおかけしてしまい本当に申し訳ございません。」
兄は驚いた顔をした後で悲しそうな顔になり、私を優しく抱き寄せた。

「いや、違うんだ、僕が許せないのは自分なんだ。」

「兄様？」

「僕は、そもそも、あの時僕が体調を崩さなければこんなことにならなかつた……リリーがラルフ皇帝にバレることもなかつた……僕の計画が……」

「計画？ なんの計画ですか？」

イキシア兄様は気まずそうな表情を浮かべ

「今のは、忘れてくれて……いざれ話すから」

と言うのでそれ以上聞くことはできなかつた、私はなるべく明るく振る舞いながら兄

を励まそうとしたが、兄には逆効果だったようで、余計に気を使わせてしまった。

「さつきからリリーに気を使わせてばかりですまない、もう寝るよ、リリーも早く休んでくれ」

そう言つてベッドへ入つていく、私はそんなに気は使っていないんだけどなーと少し思いながらも、お言葉に甘えて早めに休むことにした。

そこから数日は特に何もなく平穏な日々を過ごし、ヴァレンワート帝国との外交も問題なく進んでいった。

そんなある日のこと、ヴァレンワート帝国の使者が我が国を訪れラルフ皇帝からの手紙を渡された、その内容は

『以前話に上がった乗馬の件、都合のつく日があれば教えて欲しい、その際は誕生日に渡した本の感想を聞かせてくれると嬉しい、馬の用意はこちらで行います』

という内容だった、正直この手紙を見てすぐに断ろうと思つたが、断るにしても理由を考えなければならぬ、だからと言つて受けるのもリスクがある、そしてまた両親や家臣達がまた会議を始め結論から言つと《せつかくうまくいつている外交にケチを

つけたくないため、今回はその乗馬の誘いを謹んで受けるように」となり、手紙の返信には

『お誘い感謝します、是非ともよろしくお願い致します』
という風に返事をした。

こうして私は2週間後の日曜日に、ヴァレンワート帝国へ向かう事となった、今回は両親はおらず一人で向かうため正直緊張をしている、だが一応私事情を知るメイドと執事が二名ずつ同行してくれるため、多少なり気が楽だ。

当日私はいつものようにイキシアの格好をして、馬車に揺られヴァレンワート帝国へ向かった。

しばらくするとヴァレンワート帝国の城下町が見えてくる、以前と変わらず活気があり賑わっていた。

私は以前来たときと違い、城内にある客室がある塔へと直接案内された、室内は以前泊まった部屋とは比べものにならないほど豪華で広く、窓から外を見ると城下街が一望できた。

「すごい……」

あまりの凄さに思わず声が漏れる、それからしばらくしてコンコンツとノックの音が聞こえる

「はい」

「失礼いたします。」

扉を開け入ってきたのは以前お世話になったメイドで、内容は『ラルフ皇帝は現在早急に対応しなければならい仕事があるとの事で、今晚の会食はキャンセルで、挨拶は明日朝食時で』とのこと、私は了承し、夕食を食べた後、私は早々に就寝した。翌日、私は朝早くに起こされ着替えを済ませ朝食を食べるために食堂へと向かう、そこには既にラルフ皇帝の姿があった。

「おはようございます。」

私が軽く頭を下げて挨拶をするとラルフ皇帝は嬉しそうな笑顔で私を迎え入れてくれた。

「お待ちしております。昨夜は失礼いたしました、自分で招いておきながら急な用

事が入ってしまったって、お詫びに今日はできるだけ要望にお応えしますのでなんでも仰つてください。」

「いえ、気にしないでください。私のような者にわざわざ時間を割いていただいて恐縮です。」

「いやいや、イキシア殿は私の大切な友人です、なので遠慮なさらずに」
ラルフ皇帝は終始ニコニコしながら私と会話をし、食事を終えその後は、城から離れた場所にあるヴァレンワート王族所有の馬牧場がある高原へと向かう、さすが魔法が盛んな国だけあって馬牧場へ大人数での移動が可能で転移門が用意されていた、私はそれに驚きつつもお礼を言い中に入ると、目の前が真っ白に光り視界が戻るとそこは美しい緑が広がる草原が広がっていた、私はその景色に見惚れているとラルフ皇帝が話しかけてきた。

「どうですか？ 気持ちがいいでしょう？」

「ええ、とても気持ちが良いです。」

私は自然の空気を思いつきり吸い込む、ここ最近兄が健康なことが多く外に出れず

にいたため、久しぶりの外での外出に気分が高揚する。

後からそれぞれの使用人数名出てきて、乗馬の用意をする、客人である自分がどうこう言うのはおかしいため、全て任せることにする。

「ではイキシア殿、早速ですが馬を選びましょうか。」

ラルフ皇帝はそういうと厩舎の方に向かっていく、私もそれについていき、用意された馬を見る

「イキシア殿はどのような馬が好みですか？」

厩舎の中には様々な種類の馬がおり、どの子も毛並みが良くて綺麗で可愛らしい丁寧に管理されていることが見て取れる。

私はその中で一番気になる馬がいた、その子は黒鹿毛色で綺麗で優しそうな目をしており、他の子よりもひと回り小さかった。

「あの子が気になります。」

「ああ、あの子『ルピナス』と言ってうちで一番小さいんですけど、性格が温厚で賢くて、とても良い子ですよ。」

私はその子に近づき、そつと撫でると、その子はゆつくりと顔を近づけてきて、私の頬にすり寄ってきた。

「あはは、可愛いですね、この子に乗りたいのですが良いですか？　ラルフ皇帝」
「ええもちろん！　そのつもりで選んでもらいましたから」

ラルフ皇帝はニコリと笑う、公務の時は違い年相応に無邪気な笑みで、私もつられて笑みがこぼれる。

その後、ラルフ皇帝も馬を選び鞍を付けてもらい準備が完了すると、いよいよ乗ることとなった、久々の乗馬で少し不安だったが、いざ乗り始めると体が覚えていたのかすんなり乗りこなせた、しばらく厩舎近くで乗馬を楽しんでいると、ラルフ皇帝が馬に乗って横に並び話しかけてくる

「よろしければここから少し行つた先に湖があるのでそこに行つてみませんかすぐ綺麗なお所なんですよ？」

「はい、ぜひ！」

私達はそこからさらに移動して、湖に到着すると私はその美しさに目を奪われてしま

う、太陽の光が反射しキラキラと輝く水面に、周りを囲む木々が映えるように美しく彩られている。

私はその光景を眺めながら、馬から降り近くにあつた岩に腰を下ろすと、ラルフ皇帝は飲み物を渡してくれお札を言いつつそれを受け取り呑むラルフ皇帝は満足そうに笑いながら隣に座った。

「どうです？ 気に入っていただけましたか？」

「はい、こんなにも素晴らしい場所を見ることができて幸いです。」

「それは良かった。そういえば、以前誕生日渡したにプレゼントはいかがでしたかな？」
私は誕生日の時に貰った本を思い出した、あれはとても面白くラルフ皇帝が勧めるのも納得の出来で正直かなりハマっているのでラルフ皇帝には感謝しかなく、素直に感想を述べようとしたのだが、木の影にきらりと何かが光るのが見え瞬間に理解し気付いた時には体が動いていた

「危ない!!」

「うわっ!？」

私は咄嗟の判断でラルフ皇帝を突き飛ばし、次の瞬間私の背中を矢が刺さる、痛みに耐えながらもなんとか振り返るとそこには、この場をさる人影が見えた、

「くう……」

私は背中への激痛に膝をつく、手で傷口を抑えながらどうにか立ち上がろうとするが、力が入らずそのまま倒れそうになるところを、ラルフ皇帝が受け止めてくれる

「イキシア殿!! 大丈夫ですか!？」

「すみません……油断……しました……」

「今すぐ治療を! 失礼します!」

そう言い彼は私の服に手をかけ脱がし始める、私は傷とは別に血の気が引くのを感じる

(やばい、女であることがバレる……)

焦るが抵抗できず、矢に毒を塗っていたのか意識が遠のいていく……

目を覚すと私は昨晚止まった客室のベッドの上に寝ており、窓の外を見ると日が落ちてかけていた。

私は起き上がろうとすると背中に激痛が走る

「いっつ……」

「目が覚めましたか？」

声が出た方を見ると、ラルフ皇帝と連れてきた使用人が立っていた起きあがろうとする

「イキシア殿、無理に動かないでください、毒は吸い出しましたが結構深くまで入っていたので、しばらくは安静にしてください。」

私は言われた通りに大人しくベッドの上で横になっていると、メイドがお茶を持ってきてくれ、それを飲み一息つくとならフ皇帝は申し訳なさそうな顔をしながら私に話しかけてくる。

「まずは謝罪をさせていただきます、今回のことは本当にすいませんでした、本来であれば事前に刺客の存在に気付き対処できたはずなのに……イキシア殿を巻き込んでしまいました。」

「いえ、そんな、むしろ謝るのはこちらの方です、助けてもらった身でこのようなこ

とを言うのは大変失礼だとは思いますが……見ましたか？」

私は恐る恐る聞いてみると彼は一瞬悪い表情が浮かんだように見えたがすぐに元の顔に戻り、その様子には背筋が凍ると同時に少し恐怖を感じる、そんな私をよそ目にラルフ皇帝は

「ええしつかりと確認しましたよ？ イキシア殿は女性ですよね？」

「やっぱり……そうですね……そうですね……」

私はため息混じりに返事をする、やはり見られてしまったものは仕方がない、もう諦めるしかないだろう。

「あの、このことは……」

「わかっていません、今回治療をしたのは他言しない医者を手配しましたので、この国でこの事を知っているのはその医者と私だけとなります。そして他言は致しませんし、そもそも他国の王族の事情を詮索するのはマナー違反なのでご安心ください。」

私はほっと胸を撫で下ろしつつ、彼に質問を投げかける

「ありがとうございます、それで私はどうなるのでしょうか？」

「ああ、とりあえず容体が安定するまでしばらくここに滞在してもらおうことになりま
す。イベリス国の方には連絡済みです」

「お気遣い痛み入ります」

それから数日は、連れてきた使用人達が身の回りの世話をしてくれて、ラルフ皇帝は
毎日様子を見に来てくれた。

また、自分が女である事をわかっていて他人と話すのはすごく楽だった、最初は緊張
したが今では普通に話せるようになった。数日が経ち、体調が戻り動けるようになって
たため私はイベリスに帰国した。

帰国したら家臣は大騒ぎ、そりやそうだラルフ皇帝に私の正体がバレてしまったのだ
から、事情を知っているもの達は全員はどう対応するか会議を開かれ、私の処遇につ
いて話し合われた。

結論としては私が女であることを公表はせず、今まで通り影武者として生きることが
決まった、ラルフ皇帝には後日改めて口止めのため使者を送るらしい、一応ラルフ皇
帝の命を助けているため、私に危害を加えることはないだろうとのこと、私としても

その方が助かる。

ちなみに暗殺未遂犯逃亡し行方が掴めないらしい、

諸々が終わった後私は、兄に説教された内容は言わずもがなだ、自分の命をかえりみずは無茶をしたことについて叱られた、だが兄はそれ以上に心配していたようで、泣いて抱きしめられてしまい、罪悪感が半端じゃなかった。

それからしばらくして、ヴァレンワート帝国へ使者を送ったのだが、ラルフ皇帝から思いも寄らない回答が返ってきた。

『影武者の件は、命を助けていただいた身ですし他言するつもりは、ございません。それとは別にリリー姫君に好意を抱いているので、婚姻を申し込みたい』
とのことだった。

ヴァレンワート帝国のラルフ皇帝からの求婚を受け、またまた大騒ぎになった。

私自身、ラルフ皇帝には好印象で、特に嫌なところはなくむしろ素敵な男性だと思し、一緒にいて楽しいとも思うがそれは友人としてであって恋愛感情はない。

それに私が好きなのは兄のイクシアだけだ、正直今はラルフ皇帝の気持ちに伝えて結

婚する気はさらさらなかったが、家臣たちはそうは思わなかった、今やイキシアの体調が悪くなることは少なく、私の役割は無いも当然で正直私の扱いに困っていたのだろう、それにこれから仲良くやって行こうとしてる大国からの申し出を断るわけにもいかず、私の結婚が決定した。

この件で一番私の婚姻を反対していたのは兄であった、彼は必死に私の結婚を止めようとしていたが最終的に父上の説得により、渋々と了承した。

そして嫁ぐ前日、兄とゆつくり過ごす最後日、私は兄と一緒にベッドに座り会話をしていた。

「こーやってゆつくり過ごすのは、最後かもしれないね」

「……正直この結婚、俺はまだ納得していない」

「兄様…私も正直この結婚に乗り気ではありません、ですが兄様の体調が良くなってきた今影武者の私はもはや厄介者ですし…仕方ありませんよ」

「俺は、どんな形であろうともお前の味方であり続けるから……なあ最後に1つわがままを聞いてくれるか？」

「はい、なんででしょう？」

「リリーの初めてくれないか？」

「……わかりました、でも優しくしてくださいね？」

私は少し戸惑いつつも、彼のお願いを承諾すると、彼がゆっくりと私を押し倒しキスをしてくる。

「んっ……」

熱の籠った吐息が漏れ出す、彼は何度も角度を変えながら舌を絡ませてきて、私の呼吸を奪うかのように激しく求めてくる。

「んんっ……ふう……」

長い時間口づけをされ、ようやく離されると銀の糸が伸びて切れる。彼は私の服を脱がしていき下着姿にする、恥ずかしさで顔が赤くなるのを感じながらも、されるがままにしていると晒しを外される。

「やっぱ大きいな……」

「あまりじろじろ見ないでください……」

「綺麗だよ」

彼はそう言いながら、胸を触ってくる。初めは優しく揉みほぐすように、だんだんと強くなっていき、先端の蕾を口に含み転がしていく、もう片方は指でつままれて、私は思わず声が出てしまう。

「ひゃっ！」

「可愛いよ」

「あんまりいじめないでください……」

思わず顔を逸らすと、胸元に唇を当てられてチクツとした痛みが走る、何回かそれを繰り返して、耳を甘噛みされて、ゾワリと鳥肌が立つ。

「可愛い……僕がどんなに想っても、君は他の男のものになるんだろう？　せめてこれくらい許して欲しい……」

「兄様……あつ」

胸にキスを落とされ、羞恥心で顔がさらに赤くなっていくのを感じる。彼は私の胸に顔を埋め、私の乳首を舐めてくる。

「んう……」

「ちゅぱ……じゆる……」

彼は音を立てながら、私の乳房をしゃぶるように口に含む、時折歯を立てて嚙んでくる。

「やあ……だめえ……♡」

私は快感で頭がボーっとしながらも、なんとか抵抗しようとするが力が入らない、そんな私の様子に彼は気をよくして、私のシヨーツの中に手を入れ秘所に触れてくる。

「ここ濡れてるね、感じてくれて嬉しいよ」

「やだあ♡……そんなこと言わないで♡……」

彼は私のシヨーツを取り去り、割れ目をなぞる様に上下に動かしていくと、くちゆりと水音が聞こえ、恥ずかしくて死にそうになる。

「もうこんなに濡らしてるなんて、いけない子だね？」

「だつてえ……んっ！ ああ!!」

敏感な部分を弄られ、体がビクビクと反応してしまう、彼はそのまま膣内に指を入れ

てかき混ぜてきて、グチユグチユと卑猥な音を響かせながら、中を擦られる度に腰が跳ねるのを抑えられない。

「ああ…初めてなのに…：…こんなあ…：…だめなのに…：…♡」

「大丈夫だよ、いつても」

「ああ…：…ああああ!! ♡」

絶頂を迎えてしまい、頭の中が真っ白になり、全身が痙攣する。彼は指を引き抜くと、それを愛おしそうに見つめて、ペロリとなめる。

私は息を整えようとするが、うまくできず肩で呼吸をしていると、彼がズボンを下ろして大きくなったモノを見せてくる。

【サンプル】愛が重い王族二人に愛される

発行日 2023年5月4日

著者 野菜箱

<https://www.pixiv.net/member.php?id=6115077>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
